

『待賢門院堀河集』注釈(五)

加藤 睦

松本 真奈美

○本稿は宮内庁書陵部蔵『待賢門院堀河集』(五〇一・五七)を底本とし、その八五番歌から一〇五番歌までの本文を掲げ、注釈を施したものである。凡例については、『立教大学 日本文学』第一〇一号所載の『待賢門院堀河集』注釈(二)を参照されたい。

○本注釈における和歌の引用は、特に断らない限り『新編国歌大観』に、散文の引用は『新編日本古典文学全集』によった。ただし『今鏡』の引用は『新訂増補国史大系』に、『梁塵秘抄』の引用は『日本古典文学大系』による。いずれの場合も引用に際して適宜表記を改めた。

八五 千道すがら心もそらにながめやる都の山の雲がくれぬる
旅

【校異】○集付―千載(群) ○みやこの山の―みやこのやまは
(松)

【現代語訳】旅

旅の道すがら、うわの空ではるかに眺めていた都の山が、とうとう雲に隠れてしまったことだ。

【他出】

○『久安百首』待賢門院堀河川・羈旅・一〇九四

みちすがら心も空にながめやる都の山の雲がくれぬる

○『後葉集』旅・二七四

(百首御歌中に)

同じ歌たてまつりけるに

待賢門院堀河川

みちすがら心も空にながめやる宮この山の雲がくれぬる

○『統詞花集』旅・七一二

新院人々に百首歌めしけるに、旅の心を

堀河

みちすがら心も空にながめやる都の山の雲がくれぬる

○『千載集』羈旅・五一三

(百首歌めしける時、旅歌とてよませ給うける)

待賢門院堀河川

道すがら心もそらにながめやるみやこの山の雲がくれぬる

○『中古六歌仙』堀河局・二五五

旅

みちすがら心もそらにながめやるみやこの山のくもがくれぬる

【語釈】○道すがら 道中。道を行きながら。 ○心もそらに 心が

自分の体を離れてしまった状態で。うわの空で。「そら」に雲の縁語

「空」を掛ける。参考「いつとなく心そらなるわが恋や富士の高嶺にかかる白雲」（後拾遺集・恋四・八二五・相模）。旅の目的や旅程のことなど忘れて、ともすればぼんやり都の方角を振り返ってしまうさまを表している。 ○都の山の雲がくれぬる 都の山が雲に隠れて見えなくなってしまうことだ。都の山が視界の外に消えてしまい、旅

の寂しさがいよいよつのる気持ちを表現している。

【補説】これより『久安百首』における「羈旅」題の堀河の歌、五首すべてが『久安百首』の歌順のまま配列されている。当該歌は、都を出発してまだそう遠くまで行っていない旅人の立場からの歌。都を離れる寂しさのあまりうわの空になりながら、道中しばしば都の方角を眺めやっていたが、ついに都の山が雲の向こうに見えなくなってしまうという境地を歌った。ここでの旅路はおそらく陸路であろうが、一首は『堀河百首』の「いかばかり波間を分けて過ぎぬらむ都のかたの雲がくれゆく」（海路・一四四五・藤原顕季）を念頭に置いていよう。

八六 続古ふるさとおなじ雲居の月を見れば旅のそらをや思ひ出づらむ

【校異】○月をみは一月みれは（松）

【現代語訳】

昔なじみの地に残した人が、私が眺めているのと同じ月をいま見ているならば、旅路の空のもとにいる私のことを思い起こしてくれてい

るだろうか。

【他出】

○『久安百首』待賢門院堀川・羈旅・一〇九五

故郷におなじ雲井の月をみればたびの空をやおもひいづらん

○『続古今集』羈旅・八八二

崇徳院にたてまつりける百首に、旅歌 待賢門院堀川

ふるさとおなじくもぬの月を見ればたびのそらをやおもひいづらん

↓10番歌。 ○雲居 「宮中」を意味することもあるが、ここでは雲

のあるところ、すなわち空の意。旅にある人が昔なじみの地を思いながら「おなじ雲居」の「月」を詠じた歌に「都にも旅なる月のかげをこそおなじ雲居の空に見るらめ」（山家集・一〇九四）があり、参考になる。堀河と同時代人の西行が修行で伊勢に赴いた折に、都を思つて詠じた歌である。 ○月を見れば 主語は「ふるさと」にいる人。

○旅のそら 住み慣れた場所を離れている人にとつての空。「はるかなる旅のそらにも遅れねばうらやましきは秋の夜の月」（拾遺集・別・三三七・平兼盛）など、「旅のそら」においても昇る月は同じ、という発想に基づく歌は数多い。ここでは、旅路の空のもとにいる詠歌主体自身をも含めていう。 ○思ひ出づらむ 「思ひ出づ」は、普段は念頭にないことをふと思ひ起こすの意。

【補説】前歌同様、旅をしている人物（おそらく男性）の立場からの歌である。いま自分の見ているのと同じ月をあの人が見ているのなら

ば、旅にあつて都を思っている自分を思い出してきているだろうか、と、「ふるさと」の人の心のありように思いを馳せた一首である。昔なじみの地に残した人は妻と考へてもよいだろう。なお、作者の父源頭仲の『堀河百首』詠に、「ふるさと」に残された妻の立場から旅にある夫の心境を思いやつた歌「ふるさとの夜寒になればうつ衣旅にや君も思ひ出づらむ」（堀河百首・擣衣・八〇六）がある。当該歌とこゝとば続きもやや類似しており、注目される。

八七　しのぶべき都ならねどしかすがの渡りもやらずあはれなるかな

【校異】○集付―続詞（群）

【現代語訳】

思い慕うほどの都ではないけれど、やはりさすがに、しかすがの渡りまでやつて来ると、渡りおおせることもできず、しみじみと懐かしくなることだなあ。

【他出】

○『久安百首』待賢門院堀川・羈旅・一〇九六

忍ぶべき都ならねどしかすがのわたりもやらずあはれなるかな

○『統詞花集』旅・七〇三

新院人々に百首歌めしけるに

堀河

忍ぶべきみやこならねどしかすがのわたりもやらず哀なるかな

【語釈】○しのぶ　遠い存在のものを思慕する。○しかすがの渡り

三河国の歌枕。現在の愛知県宝飯郡、豊川の川口にあつた渡し場。

「そうではあるが」の意の「しかすがに」を連想させることから、「思ひわづらふ」「渡りわづらふ」などの語をともなつて歌われることが多い。ここでは「渡り」に「渡りもやらず」を掛ける。↓【補説】。○あはれなるかな　ありふれた歌句ではあるが、作者の父源頭仲の『堀河百首』詠に「かへり来て見るべき身とも頼まねば今日の別れのあはれなるかな」（堀河百首・別・一四七八）の用例がある。

【補説】都から東国への旅をしている人物の立場からの歌。詠歌主体は都にそれほど未練があるわけではないが、ここ「しかすがの渡り」では都への懐かしさが募り、ただちに渡ることができずにいる。歌枕「しかすがの渡り」の伝統的な詠法に基づきつつ、矛盾をはらむ旅の心を表現した一首である。本来ならば思慕するはずの都について「しのぶべき都ならねど」と言っているのは、詠歌主体が都で不遇なあるいは孤独な生活を送っていたことを窺わせる。また、能因が陸奥下向の途次、「しかすがの渡り」で都の恋しさを詠じた「思ふ人ありとなけれどふるさととはしかすがにこそ恋しかりけれ」（後拾遺集・羈旅・五一七）と歌境が類似しており、作者の念頭にあつたことが想定される。

八八　旅のそらおのがつらとや思ふらん宿かりがねの近く聞こゆる

【校異】異同ナシ（松・群）

【現代語訳】

旅の境遇にある私を、自分の仲間と思っているのであるうか。宿を

借りるという名を持つ雁の声が、近くに聞こえるよ。

【他出】

○『久安百首』待賢門院堀川・羈旅・一〇九七

たびの空おのづからとやおもふらん宿かりがねのちかくきこゆる

【語釈】○旅のそら 旅路の空。ここでは、旅路の空のもとにいる歌主体自身を言う。↓86番歌。 ○おのがつら 自分の仲間。「つらは

は「列」で、連なるもの意。参考「初雁は恋しき人のつらなれや旅のそら飛ぶ声の悲しき」(源氏物語・須磨・光源氏)。 ○宿かりが

ね 宿を借りるという名を持つ雁。すなわち旅ゆく雁。「宿借り」と

「雁金」を掛ける。↓【補説】。

【補説】やはり旅をしている人物の立場からの歌である。はるか上空を飛ぶ雁の声が近く聞こえるのは、宿を借りるという名を持つ雁が、

旅人である私を自分の仲間と思っているからであろうか、と歌ったものの。旅人の立場から、同じように「旅のそら」にあるものとして「雁」

をとらえた先行歌に「草枕われのみならずかりがねも旅のそらにぞなき渡るなる」(拾遺集・別・三四五・大中臣能宣)がある。当該歌は

これを念頭に置いていよう。同趣の歌は、大治元年(一一二六)に行われた『摂政左大臣家歌合』にも「さ夜ふかき雲居に雁もおとすなり

われひとりやは旅のそらなる」(旅宿雁・四・源雅光/千載集・羈旅・五〇八)のように見出され、『久安百首』に先立つ同時代の例

として注目される。

また「宿かりがね」「近く聞こゆる」という語句は、同時代の『為

忠家初度百首』にも次のように歌われている。

われひとり旅のそらとは思へども宿かりがねもなき渡るなり

(羈旅雁・三五二・藤原為業)

夕暮に宿かりがねぞ聞こゆるわれひとりとも思ひけるかな

(羈旅雁・三五三・藤原盛忠(為経))

おぼつかないづれの宿にうゑたらん荻吹く風の近く聞こゆる

(隣家荻・三四五・藤原盛忠(為経))

八九 はかなくもこれを旅寝と思ふかないづこも仮の宿とこそ聞け

【校異】○集付―続後拾(群) ○はかなくも―はかなくそ(群)

○いつこもかりの―いつれもかりの(松)

【現代語訳】

浅はかなことに、これを寂しい旅寝と思うことだなあ。この世はどこにいてもかりそめの宿りと聞くのに。

【他出】

○『久安百首』待賢門院堀川・羈旅・一〇九八

はかなくもこれをたびねとおもふかないづこもかりの宿とこそきけ

○『続詞花集』旅・七三六

百首御歌中に

新院

はかなくもこれを旅ねとおもふかないづこもかりのやどとこそきけ

○『万代集』雑四・三四四一

久安百首に

待賢門院堀川

はかなくもこれをたびねとおもふかないづくもかりのやどとこそき
け

○『続後拾遺集』羈旅・五七七

久安百首歌に、羈旅

待賢門院堀川

はかなくもこれをたびねと思ふかないづくもかりの宿とこそきけ

○『中古六歌仙』堀河局・二五六

(旅)

はかなくもこれをたびねとおもふかないづくもかりのやどとこそき
け

【語釈】○はかなくも これといった深い考えもなしに。○旅寝

いつもの住まい以外の場所ですること。

無常の現世をいうことが多い。『法華経』化城喩品に登場する「化城」

(真の目的地に到達するための方便としてかりそめに作られた城)の

翻案語。参考「長き夜の苦しきことを思へかし何なげくらむ仮の宿り

に」(詞花集・雑下・四〇九・読人不知)。

【補説】旅寝の床にある人物の立場からの歌。旅の途上のかりそめの
宿りは寂しいものだが、よく考えれば今この時だけが旅寝なのではな

く、現世そのものが仮の宿りなのだ、と旅寝の寂しさを相対化しよ

うとした一首である。題は異なるが、『堀河百首』における作者の父源

頭仲の「はかなしやいづくもかりのすみかをば何なかぞらに行き帰る

らん」(帰雁・一九八)を色濃く念頭に置いていよう。なお他出文献

のうち『続詞花集』は、誤って作者を新院(崇徳院)としている。

祝いはひ

九〇 君が代は枝えだもうごかぬ松風にひさしきことを調しらぶなるかな

【校異】異同ナシ(松・群)

【現代語訳】祝

わが君の御代は、千年の寿命を持ち枝も動かない松を吹く風によっ
て、いつまでも続く琴の音を奏でているようだなあ。―そのように、
長く続くことでしょう。

【他出】

○『久安百首』待賢門院堀川・慶賀・一〇八四

君が代は枝ももうごかぬ松風にひさしき事をしらぶなるかな

【語釈】○君が代は わが君の御代は。賀歌の常套句。作者の父源頭

仲は『堀河百首』における「祝詞」題の歌、『永久百首』における

「賀」題の歌の初句にいずれもこの歌句を用いている。○枝ももうご

かぬ 安定しているさま、盤石であるさまの表現。「歌林苑に、柳風

静といへることをよめる／玉柳枝ももうごかぬ君が代になびくや風のし

るしなるらん」(月詣和歌集・二月附別部・八六・藤原伊綱)。○

松風 松の梢に吹く風。「松」が千年の寿命を持つとされることから

「松風の吹かむ限りはうちはへて絶ゆべくもあらず咲ける藤波」(拾

遺集・雑春・一〇六七・紀貫之)のように、長久の世を約束する風を

連想させる。また、聴覚的な類似から琴の音を連想させることもある。

「琴の音に峯の松風かよふらしいづれのをより調べそめけん」(拾遺

集・雑上・四五一・斎宮女御)。当該歌の「松風」はこの双方の機能を持つと見られる。○ひさしきこと いつまでも続く琴、また、長く続く事。「松風」の縁で「事」と「琴」を掛ける。○調ぶ 楽器を演奏する。

【補説】『久安百首』における「慶賀」題の歌。【語釈】に引いた斎宮女御の著名歌を念頭に置きつつ、賀歌にふさわしい歌句を置き、長久の世を寿いだ一首である。類似の趣向の歌に、後一条天皇の大嘗会和歌として詠まれた「千代とのみおなじことをぞ調ぶなる長田の山の峯の松風」(千載集・賀・六三四・善滋為政)がある。

以上、五〇番歌からこの九〇番歌までが『久安百首』詠進歌を収めた歌群である。

早苗とる人

九一 早苗とる田子の裳裾にあらねども我もこひぢに袖ぞぬれぬる

【校異】○我もこひぢに―我か戀路に(群)

【現代語訳】早苗をとる人

早苗をとる田子の裳裾ではないけれども、それが泥で濡れるように、私ものつらい恋路に涙を流し、袖を濡らしてしまったことだ。

【語釈】○早苗とる 稲の苗を苗代から田へ移し、植えつける。「早苗」は『堀河百首』題に見える。勅撰集では『後拾遺集』から夏歌の素材となり、歌合題としては長久二年(二〇四二)『権大納言師房歌合』が初出。○田子の裳裾 田で働く農夫の衣服の裾。初二句に

「早苗とる田子の裳裾」という表現をもつ和歌には『高遠集』(三三五)、『散木奇歌集』(二一八二)などがあるが、当該歌は『堀河百首』における河内詠を念頭に置いていよう。↓【補説】。○こひぢ 泥(こひぢ)と「恋路」との掛詞。「五月雨に苗引き植うる田子よりも人をこひぢに我ぞぬれぬる」(古今和歌六帖・五月・九二)。

【補説】「早苗とる人」という季の題による題詠歌のように見えるが、実際は、早苗とる人に寄する恋の歌になっている。早苗をとる作業のために泥に濡れる田子の裳裾に寄せ、恋に苦しむ人の立場から涙で袖を濡らす思いを歌った一首である。前述の通り次の河内詠を色濃く念頭に置いていようが、同じ『堀河百首』の永縁詠とも措辞が類似しており、影響が想定される。

早苗とる田子の裳裾にあらなくに濡れ衣をのみなどか着ぬらん

(堀河百首・早苗・四一六・河内)

早苗とる田子は恋すとなけれども苗代水に袖ぞぬれぬる

(堀河百首・早苗・四一二・永縁)

萩の上の露

九二 萩の上の露もとまらでゆく人を花摺り衣かへれとぞ思ふ

【校異】異同ナシ(松・群)

【現代語訳】萩の上の露

萩の上の露、ではないが、つゆもとまらず少しも私のもとに留まらないで離れてゆく人を、花摺り衣の色がかえるように、帰ってきて

ほしいと思うことです。

【語釈】○萩の上の露 萩の葉の上に降りた露。『基俊集』（三七）にも同じ歌題が見える。歌語としては、はかないもの、また物思いの涙を連想させる。「なき渡る雁の涙や落ちつらむ物思ふやどの萩の上の露」（古今集・秋上・二二一・読人不知）。当該歌では、歌においては初句の「萩の上の」が「露」と同音の副詞の「つゆ」を導く序詞となっている。なお「萩」「露」はいずれも秋歌の伝統的素材。○露もとまらで 少しも私のもとに留まらないで。「つゆ」は副詞。下に打消を伴って「少しも（…ない）」の意となる。○花摺り衣 萩や露草の花の汁を布地にすりつけて染めた衣。「更衣せむや さきむだちや 我が衣は 野原篠原 萩の花摺や さきむだちや」（催馬楽・更衣）に基づく表現。同時代にも「高田の野をすぎゆけば秋萩の花摺り衣きぬ人ぞなき」（堀河百首・萩・六〇八・河内）の例がある。当該歌では「かへれ」と同音の「帰れ」を導く序詞。○かへれ ついた色があせる意の「かへれ」と「帰れ」とを掛ける。

【補説】九一番歌同様、季節の景物に寄せた人事詠。女性の立場から、疎遠になった恋人への思いを歌った恋歌とも、また旅立つ知人との別れを惜しむ離別歌とも読める。『堀河百首』の河内詠を念頭に置いているらしいことも九一番歌と共通している。

枕の下のきりぎりす

九三 黒髪の別れを惜しみきりぎりす枕の下にみだれ鳴くかな

【校異】異同ナシ（松・群）

【現代語訳】枕の下のきりぎりす

黒髪を預けたあの人との共寝の別れを惜しみ、きりぎりすは、私の枕の下で声を乱れさせて鳴いているなあ。

【語釈】○黒髪の別れ 「黒髪の」は、黒髪が分かれることから枕詞的に「別れ」を導く。ここでは「黒髪の」と「別れ」とが実質的に関連すると見て、黒髪を恋人にゆだねて共寝をした後の後朝の別れと解した。参考「黒髪のおかで別れしのちよりはみだれてものの嘆かしきかな」（為忠家後度百首・絶後恋・六三三・藤原為業）。↓【補説】。○別れを惜しみ 同じ歌句を持つ先行歌に「しのめの別れを惜しみ我ぞまづ鳥よりさきになきはじめつる」（古今集・恋三・六四〇・寵）がある。○きりぎりす 現在のコオロギ。秋歌の伝統的素材。↓36・37番歌。「枕」のそばで鳴く「きりぎりす」を歌った例に「我がごとく物や悲しききりぎりす枕つどへに夜もすがら鳴く」（古今和歌六帖・きりぎりす・三九九〇）、本集（三六）、『山家集』（四五五）などがあるが、直接的には作者の父源頭仲の作例「夕されば蓬がねやのきりぎりす枕の下に声ぞ聞こゆる」（大治三年（一一二八）南宮歌合・一三〇／続千載集・秋下・五二八）からの影響であろうか。なお「床の下」で鳴く「蟋蟀」は「十月蟋蟀我が牀下に入る」（詩経・豳風・七月）など、漢詩に例がある。○みだれ鳴くかな 「乱れ」は髪の縁語。同じ結句を持つ類似の主題の歌が同時代の『永久百首』にある。「ねくたれの髪の中なるきりぎりすかしましくもみだれ鳴くかな」

(永久百首・葦・三三六・大進)。

【補説】きりぎりすが枕の下のあたりで鳴いているのは、私の心と同じように、黒髪をゆだねた恋人との共寝の別れを惜しんで思い乱れているためと詠じた一首。女性の立場からの歌である。「黒髪」は作者堀河の代表作「長からむ心も知らず黒髪のみだれて今朝は物をこそ思へ」(久安百首・恋・一〇六七)、またその発想源となった「黒髪のみだれも知らずうちふせばまづかきやりし人ぞ恋しき」(後拾遺集・恋二・七五五・和泉式部)に詠まれた素材でもある。この「黒髪」の語の使用により、当該歌は【語釈】に引いた顕仲詠に比し、妖艶な境地を表現し得ていると言えよう。

葦間の氷

九四 葦根はふ入江の氷むすばほれ長からぬ世をなげかずもがな

【校異】異同ナシ(松・群)

【現代語訳】葦間の氷

葦の根が這う入江の氷が張るように、私の心も鬱々とわだかまり、長くない人生を嘆かずになりたいと思うことです。

【語釈】○葦間の氷 葦の茂みの間に張る氷。歌題としての例は同時代までに未見だが、歌句としては「狭筵はむべさえけらし隠れ沼の葦間の氷ひとへしにけり」(後拾遺集・冬・四一八・頼慶)など、平安中期以降の冬歌に散見する。○葦根はふ 葦の根がからみつく。葦の根は節(よ)の間が短いことから「世」「夜」「短し」などを連想

させる。「難波女にみつとはなしに葦の根のよの短くて明くるわびしさ」(後撰集・恋四・八八七・小野道風)。○入江の氷 湖や海が陸地に入り込んだところに張った氷。初二句は「むすばほれ」を導く序詞。○むすばほれ 「むすばほる」は、水分が固まって霜や氷となるの意。また、心が鬱屈した状態になるの意。○長からぬ世 この先長くない自分の人生。「葦根」と縁がある「長からぬ節(よ)」を掛ける。

【補説】葦間の氷に寄せる述懐。この先の短い人生を嘆かずにごしたいと願うのは、嘆くことの多かった詠歌主体のそれまでの境遇を思わせる。以上、九一番歌からの四首には夏、秋、冬の素材に寄せた人事詠が収められている。

恋

九五 わきかへり岩間の水のいはばやと思ふ心をいかでもらさむ

【校異】○集付―続千(群)

【現代語訳】恋

激しく動揺し、岩間を流れる水のように恋心を口に出して伝えたいと思う心を、何とかしてあの人にひそかに知らせたい。

【他出】

○『続千載集』恋一・一〇六四

恋歌の中に

待賢門院堀河

わきかへりいはまの水のいはばやおもふ心をいかでもらさん

【語釈】○わきかへり 心が激しく動揺する意の「わき返り」に、水が激しく噴きあげる意の「湧き返り」を掛ける。「心には下行く水のわきかへりいはで思ふぞいふにまされる」（古今和歌六帖・いはで思ふ・二六四八）。↓【補説】。○岩間の水 岩と岩の間を流れる水。

第二句は同音反復式に「いはばや」を導く序詞。○いはばや 恋心を口に出して伝えたい。○いかでもらさむ 心を「洩らす」に水の縁語「漏らす」を掛ける。「思ひあまりいかでもらさん奥山の岩垣こむる谷の下水」（堀河院艶書合・一・藤原公実／金葉集・恋上・三八二）。

【補説】恋愛のごく初期にある男性の立場から、恋心を相手に打ち明けたい思いを歌った歌。同音反復式の序詞を用い、水の縁語をちりばめて構成した、技巧的にも端正な一首である。なお、当該歌と同様に「わきかへり」「思ふ心」をとともに用いた歌が、堀河自身の作を含め同時代の百首歌に見え、注目される。

最上川 瀬々のいはかど わきかへり 思ふ心は おほかれど……

（堀河百首・述懐・一五七六・源俊賴）

わきかへり思ふ心は有馬山絶えぬ涙や出で湯なるらん

（久安百首・待賢門院堀川・恋・一〇六六）

九六 よそふべきかたも知られぬ恋なればいかにいひてかもらしそむ
べき

【校異】異同ナシ（松・群）

【現代語訳】
たとえるすべもわからない恋なので、どのようにことばにして打ち明けたらよいだろうか。

【語釈】○よそふ たとえる。何か別のものを例に引いて説明する。「海も浅し山もほどなしわが恋を何によそへて君にいはまし」（拾遺集・恋一・六六〇・読人不知）。○かた 方法。手段。○いかにいひてか 「言ふ」はことばを口に出すの意。参考「怨みてののちさへ人のつらからばいかにいひてか音をも泣かまし」（拾遺集・恋五・九八五・読人不知）。○もらしそむ ひそかに知らせる。

【補説】心のありようは、何か他のものにとえることができれば表現しやすい。しかし詠歌主体の恋心は他のどんなものにもたとえようがないために、どのように相手に伝えたらよいかわからない。恋愛のごく初期にある男性の立場から、そうした感乱を詠じた一首である。

【語釈】に引いた『拾遺集』歌二首を念頭に置いていよう。

九七 みるめなみかけぬ間もなき袖のうらに忘れ貝をばえこそ拾はね

【校異】○みるめなみ―底本「みるめなき」。「見るめなみ」（群）

により校訂

【現代語訳】

海松布がないので、波をかけない間もない袖の浦に、忘れ貝を拾うことはできない―あの人と逢う機会がないので、涙をかけない時とてない私の袖の裏だから、あの人を忘れることなどできないよ。

【語釈】○みるめ 海藻の意の「海松布（みるめ）」に、逢瀬の機会の意の「見る目」を掛ける。「みるめなきわが身をうらと知らねばやかれなで海人の足たゆく来る」（古今集・恋三・六二三・小野小町）。

○かけぬ間もなき 目的語「波を」が省略されていると解した。「海松布」がないゆえに、波が遮られることなくひっきりなしに「袖の浦」にかかることを言う。逢瀬がないために常に袖の裏に涙をかけることを暗示。○袖のうら 出羽国の歌枕。現在の山形県酒田市宮野浦とされるが、「袖の裏」を連想させる機能が濃厚な歌ことばである。「君恋ふる涙のかかる袖のうらは巖なりとも朽ちぞしぬべき」（拾遺集・恋五・九六一・読人不知）。○忘れ貝 二枚貝の放れた一片、もしくはアワビのような一枚貝。拾うと恋を忘れることができることされた。「若の浦に袖さへ濡れて忘れ貝拾へど妹は忘れなくに」（万葉集・巻十二・三一七五）。

【補説】掛詞により二つの文脈を持つ歌である。物象の文脈は、海松布がないため波がひっきりなしにかかる袖の浦なので、忘れ貝を拾うことはできないの意。心象の文脈では、逢瀬がないために常に袖の裏には涙がかかり、つれない相手を忘れてしまうことができないと歌う。逢瀬がないことに対する嘆きの強さから、男性の立場からの歌である。書陵部蔵御所本『中務集』に類似の趣向の歌「しきりつつ涙のかかる袖のうらに忘れ貝をば拾はざりけり」（二八五）があるが、「海松布」と「見る目」の掛詞をも用いた当該歌はさらに技巧的な詠みぶりと言えよう。

九八 つつみあまる涙の色はくれなゐの濃染の袖にかけて忍ばん

【校異】異同ナシ（松・群）

【現代語訳】

包みきれずあふれる涙の色は、紅の濃く染めた衣の袖にかけて、人目に立たないようにしよう。

【語釈】○つつみあまる涙 袖に包みきれないほどおびただしく流れる涙。参考「いかにせん数ならぬ身にしがはでつつむ袖よりあまる涙を」（金葉集・恋上・三八四・読人不知）。○涙の色 激しい悲嘆の涙の色は、血の色すなわち紅色とされる。「涙の色のくれなゐは 我らがなかの 時雨にて」（古今集・雑体・二〇六・伊勢）。○くれなゐの濃染の袖 紅色を濃く染めてある衣の袖。参考「くれなゐの濃染の衣したに着てうへにとり着ばしるからんかも」（古今和歌六帖・衣・三二六／万葉集・巻七・一三二三）。↓【補説】

【補説】袖からあふれる涙の血の色は、濃い紅色の袖に注いで目立たなくしようと歌った一首。血の涙が流れるほどの激しい恋の嘆きが詠まれていることからすると、男性の立場からの歌であろう。「くれなゐの濃染の袖」と類似の歌句は、長治元年（一一〇四）『左近権中将俊忠朝臣家歌合』の出詠歌「くれなゐの濃染の衣うへに着む恋の涙の色かくるやと」（詞花集・恋上・二一八・藤原頭綱）にも見える。当該歌は直接的には、この頭綱詠と【語釈】に引いた金葉集「いかにせん」詠を踏まえていようか。

九九 いまはただつれなき人の恋をしてわがなげきをも思ひ知れかし

【校異】○わがなげきをも―底本「わかなげ（二字分空白）をも」。

「わかなげきをも」（松）、「我なげきをも」（群）により校訂

【現代語訳】

すっかり忘れられてしまった今となってはただ、薄情なあの人が恋をして、私の嘆きを思い知ってほしい。

【語釈】○いまはただ 相手からすっかり顧みられなくなった今はただ。恋愛末期の嘆きの歌にしばしば用いられる歌句。「いまはただ思

ひたえなんとばかりを人づてならでいふよしもがな」（後拾遺集・恋

三・七五〇・藤原道雅）。○つれなき人 冷淡な人。↓72番歌。

○恋をして 自分以外の誰かに恋をして。「つれなき人」に逢うこと

をあきらめ、思いを断ち切ろうとしていることを窺わせる捨て鉢な願

望。○わがなげき 今の自分と同じような、薄情な恋人に冷たくさ

れる嘆き。下句は「人知れぬ思ひのみこそわびしけれわがなげきをば

我のみぞ知る」（古今集・恋二・六〇六・紀貫之）を念頭に置いてい

よう。

【補説】自分に冷淡なあの人が恋をしてその相手から冷たくされ、自

分と同じ嘆きを味わえばよいと、恋の終末期の心情を詠じた一首。

「つれなき人」を恨む激しい口調から、男性の立場からの歌であろう。

本集79番歌も類似の境地を歌っており、同時代の『久安百首』にも類

似歌「恋するは苦しきものをいかにしてつれなき人に思ひ知らせむ」

（藤原頭輔・恋・三六四）がある。

すだれを隔てたる恋

一〇〇 玉すだれ誰ともしらぬ透き影を見るに心のかかりぬるかな

【校異】異同ナシ（松・群）

【現代語訳】簾を隔てた恋

美しい簾の向こうの誰ともわからない透き影を見ると、心が寄り添ってしまったなあ。

【語釈】○すだれを隔てたる恋 簾越しに女性の姿をおぼろげに見て

心を動かす恋。恋のごく初期の段階の歌題である。「すだれを隔つる

恋」（藤原公重『風情集』二九題）、「ある所にてすだれを隔てたる

恋といふことを人々詠み侍りしに（下略）」（藤原実定『林下集』二

四二詞書）、「隔簾遇恋」（『教長集』七五六題）など、同時代歌人

の家集に類似の歌題の例がある。○玉すだれ 美しい簾。「たまた

れ」とも。接頭語「玉」は美称を表す。細い竹などを糸で編み、縁を

つけた障屏具。日光や人の視線を隔てるため、垂れ下げて用いた。

「玉すだれ糸の絶えまに人を見てすける心は思ひかけてき」（拾遺集・

恋一・六六三・読人不知）。○誰ともしらぬ その人が誰であると

もわからない。「かげろふのほのめく影に見てしより誰ともしらぬ恋

もするかな」（古今和歌六帖・かげろふ・八二六）。○透き影 物

越しに見える人や物の姿形。○見るに心のかかりぬるかな 見ると

心はその透き影に寄り添ってしまったなあ。ことば続きは「かりにと

て我は来つれど女郎花見るに心ぞ思ひつきぬる」(拾遺集・秋・一六五・紀貫之)の下句に似る。「かかり」は玉すだれの縁語。

【補説】簾越しに見える透き影を目にしたことで、誰ともわからない相手に恋心を抱いた境地を歌った一首。男性の立場からの歌である。当時の貴族の邸宅においては、女性はみだりに自分の姿を見られないよう心を配り、簾や几帳の内側で過ごすことが常であった。だからこそ男性は、簾の向こう側の女性の気配にさえも心が惹きつけられるのである。古歌を彷彿とさせる歌句で構成した、なだらかな調べの一首である。

かたみに恋ふ

一〇一 君と我かよふ心のゆきもあはであやしくまどふ恋の道かな

【校異】〇あやしくまどふ―あやしくまよふ(松)

【現代語訳】互いに恋しく思う

あなたと私は、通う心がお互いに行き合うこともなくて、不思議に心が乱れる恋の道であるなあ。

【語釈】〇かたみに恋ふ それぞれ互いのことを恋しく思う。「互片思恋」(『頼政集』四四七題)、「互忍恋」(『忠度集』六二題)、「互憑誓言恋」(『教長集』七六九題)など、同時代歌人の家集に類

似の歌題が見える。〇君と我 あなたと私。〇かよふ心 相手のもとへ向かう心。〇ゆきもあはで 出逢うこともなくて。「ゆきあふ」は二つのものがめぐり会う。参考「住吉の千木の片削ぎゆきもあ

はで霜置きまよふ冬は来にけり」(堀河百首・霜・九二〇・源俊頼)。

〇あやしくまどふ 不思議に心が乱れる。「惑ふ」はどうすればよいかわからずに心が乱れるの意。道に迷う意の「まどふ」を掛ける。

〇恋の道かな 恋の道であるなあ。「由良のとをわたる舟人かぢを絶え行方も知らぬ恋の道かな」(好忠集・四一〇)。

【補説】互いに相手を恋しく思っているが心がすれ違い、逢瀬にたどりつけないことを嘆いた歌。「あやしくまどふ恋の道」という能動的な表現から、男性の立場からの歌であろう。「通ふ」「行き逢ふ」「まどふ」と、「道」にまつわることばを連ねて構成した一首は、「恋てへば知らぬ道にもあらなくにあやしくまどふわが心かな」(古和歌六帖・恋・一九七八)に依拠しているようか。【語釈】に引いた曾祢好忠の著名歌も念頭に置いていよう。

石に寄せたる

一〇二 あふことをとふ石神のつれなきにわが心のみ動きぬるかな

【校異】異同ナシ(松・群)

【現代語訳】石に寄せた(恋)

逢うことがかなうかどうかを占う石神のそっけなさに、私の心だけが揺れ動いてしまったなあ。

【他出】

〇『金葉集』恋下・五〇八

奇石恋といふ心をよめる

前斎院六条

あふ事をとふいしがみのつれなさにわがこころのみうきぬるかな

【語釈】○石に寄せたる 石に寄せた恋。「寄石恋」題は、『雅兼集』

(六〇)、『実家集』(二六三)、俊恵『林葉和歌集』(九一七)、

『頼政集』(四二五)、『二条院讃岐集』(五一)など、同時代以降

の歌人の家集に散見する。○あふこと 男女が契りを結ぶこと。

○とふ 占いをしてその結果を見る。○石神 石を神として祭った

もの。石に神霊が宿るとする民間信仰に基づく。和歌における早い用

例に「社にもまだきね据ゑず石神は知ることかたし人の心を」(小野

篁集・一二)がある。【補説】に引いた為業詠を参考にすれば、占い

の結果が良い場合には動くと言われたのであろう。○つれなき 反応

のないこと。ここでは、石神が動かないこと。○わが心のみ動きぬ

るかな 石神は動かなかつたが、私の心だけが動揺してしまったの意。

【補説】はかばかしくない恋占いの結果に揺れる思いを詠じた一首。

逢瀬がかなうかどうかを占う、という積極的な内容から、男性の立場

からの歌であろう。「前斎院六条」の名で『金葉集』に入集している

ことから、作者堀河にとつて比較的早い時期の詠作である。「石神」

を詠む歌は珍しいが、第二句以外は歌らしいことばや句でまとめた、

端正な一首である。なお当該歌の影響歌と思われる歌に「あふことを

とふ石神のゆるがねば得がたき恋とそらに知られぬ」(為忠家初度百

首・ト恋・六〇一・藤原為業)や、季節詠ではあるが「石神の占いを

とはんこの暮に山ほととぎす聞かや聞かずや」(久安百首・藤原公能・

夏・一二七)がある。

ふみみ
文見ぬ

一〇三 ながれて頼めしかども水茎のあとさへ今はかき絶えにけり

【校異】○たのめしかともたのめしことも(松)

【現代語訳】手紙を見ることのない(恋)

いつまでも二人の仲は絶えることはない、あの人は私にあてにさ

せたけれども、あの人からの手紙までも、今はすっかり絶えてしまっ

たことよ。

【語釈】○文見ぬ 手紙の絶えた恋。恋人からの訪れが途絶え、便り

も来なくなった段階の恋である。「不見書恋」または「文を見ぬ恋」

という歌題は、『永久百首』(四五七〜四六三)や『散木奇歌集』

(一〇二六・一一五一)などに見える。○ながれてと 「ながる」

は時が過ぎる。したがって「ながれて」は、時が過ぎても(二人の仲

は絶えることはない)の意。「水(茎)」の縁語「流れ」を掛ける。

「ながれてと頼むるよりは山河の恋しき瀬々に渡りやはせぬ」(拾遺

集・恋一・六九一・読人不知)。↓【補説】。○頼めしかども あ

の人は期待させたけれども。○水茎のあと 筆跡、手紙。「かひな

しと思ひな消ちそ水茎のあとぞ千歳の形見ともなる」(古今和歌六条・

ふみ・三三七九)。○かき絶えにけり すっかり途切れてしまった

よ。「水茎」の縁語「書き」、また「水」の縁語「絶え」を掛ける。

【補説】変わらぬ心をかけて誓った相手からの手紙までも今は来な

くなったという、恋の終末期の境地を歌う。当時の恋愛において、手

紙を受け取る側は女性であることが多いため、女性の立場からの歌である。なお当該歌の初二句と類似の歌句が「ながれて頼めしことは行末の涙のうへをいふにぞありける」（小町集・八〇／続古今集・恋五・一三二五）や、康和四年（一一〇二）披講の『堀河院艶書合』における歌「逢瀬をはながれてこそ頼めしかいかにとだにも音無の滝」（三九・紀の君）に見える。また建礼門院右京大夫が藤原隆信との仲を顧みて詠じた次の歌は、当該歌と酷似している。当該歌からの影響が想定されようか。

ながれて頼めしことも水茎のかき絶えぬべきあとの悲しさ

（建礼門院右京大夫集・一六三）

江えに寄よする

一〇四 みさごある入江の水はあさけれど絶えぬを人の心こころともがな

【校異】○あさけれど―底本「あまけれど」。「あさけれど」（松）、

「浅けれど」（群）により校訂 ○集付―新續古（群）

【現代語訳】江に寄せる（恋）

みさごがいる入江の水は浅いけれど絶えることはない、そのように、浅いけれど絶えないということを、あの人の心（愛情）としたいことよ。

【他出】

○『新統古今集』恋四・一三七〇

寄江恋といふ事を

待賢門院堀川

みさごある入江の水はあさけれどたえぬを人の心ともがな

【語釈】○江に寄する 江に寄せる恋。「江」は海や湖の一部が陸地に入り込んで水をたたえたところ。「寄江」または「寄江恋」という歌題の例は同時代までには見られないが、『古今和歌六帖』第三の項目に「江」がある。○みさごある みさごがいる。「みさご」は海辺や湖岸に住む猛禽。「みさごある荒磯に生ふるなのりそのよし名は告らせ親は知るとも」（万葉集・卷三・三六三／古今和歌六帖・なのりそ・一八四五）など、『万葉集』に散見する歌句。○あさけれど 絶えぬ 水が浅いけれどもなくなるならない意に、人の愛情が浅いけれどもずっと続く意を掛ける。○人の心ともがな あの人の心としたいものだよ。「人」は恋の相手をさす。参考「風吹けば藻塩のけぶりかたよりになびくを人の心ともがな」（詞花集・恋上・藤原親隆・二二八）。

【補説】恋人（あるいは夫）の愛情に不安を感じている女性の立場からの歌であろう。上句は『堀河百首』の「かもめある入江の水は深けれど底まで月の影はすみけり」（堀河百首・月・七九四・藤原顕仲）を念頭に置いていようか。万葉風の歌語を用い、たとえ浅くともいつまでも続く愛情を求める思いを詠じた点が当該歌の趣向である。

浦うらに寄よする

一〇五 かひなくてかへる波なみとは知りながらなほこりずまのうらみに

ぞ行く

【校異】異同ナシ（松・群）

【現代語訳】浦に寄せる（恋）

むなしく帰ることになるとは知りながら、やはり懲りずにあの人のもとに行き、あの人を恨んでしまうことだ。

【語釈】○浦に寄する 浦に寄せる恋。「浦」は海や湖が湾曲して陸地に入り込んだところ。「寄浦恋」題は『千載集』（恋四・八七九・二条院内侍参河）、「重家集』（三三三）に見える。○かひなくて 甲斐（＝望んだほどの効果）がなくて。当該歌では、逢いたいと思つて訪れた相手に逢えなくての意。「甲斐」に「貝」を掛ける。○かへる 「帰る」に「波が」返る」を掛ける。○なほこりずまのうらみにぞ行く 「こりずまの浦」は摂津国の歌枕。現在の神戸市須磨区の海岸「須磨の浦」に、懲りないままの意の「懲りずま」を掛けて言つた表現。「風をいたみくゆる煙の立ちいでてもなほこりずまのうらぞ恋しき」（後撰集・恋四・八六五・紀貫之）。当該歌では「浦」に「恨み」を掛ける。

【補説】逢瀬を許してくれない恋人のつれなさに苦しむ男性の立場からの歌。これまでの経験から、逢えずに帰ることになると知りながら、性懲りもなく恋人のもとに通い、不満を募らせる境地を歌う。「貝」「返る」「波」と、「浦」に縁のあることを連ねて一首を構成している。なお一首のことば続きは、【語釈】に引いた貫之詠や、「明けぬれば暮るるものとは知りながらなほ恨めしき朝ぼらけかな」（後拾遺集・恋二・六七二・藤原道信）を念頭に置いていよう。同時代の

「つかの間もとまらで過ぐと知りながらなほこりずまに惜しむ春かな」（堀河百首・三月尽・三一・藤原仲実）にも類似の歌句がある。

（かとうむつみ 本学教授）
（まつもとまなみ 尚綱学院大学教授）